

女性と音楽研究フォーラム 会報 第9号

Bulletin of Women & Music Study Forum Vol. 9 (July 2009)

目次

George Sand から George Moore へ ～19世紀小説中の女性オペラ歌手の描写～ [2007年度第5回例会発表要旨] (吉田朱美)	2
Wilhelm Heinrich Riehl の家庭音楽論 [2007年度第6回例会発表要旨] (玉川裕子)	4
“Think globally, Act locally/ 地球規模で考え、地域単位で動く” ～柳兼子(1892-1984)の発言から見る「日本・女性・音楽」～ [2007年度第7回例会発表要旨] (小林緑)	6
金井喜久子の音楽活動～作曲に対する意識の変化を追う～ [2007年度第8回例会発表要旨] (花岡美智)	8
会員自己紹介コーナー	10
コンサート情報	11
ニュース etc.	12



George SandからGeorge Mooreへ
～19世紀小説中の女性オペラ歌手の描写～

吉田 朱美 (よしだ あけみ)

この発表ではフランスの女性作家ジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-1876) の音楽家小説『コンシュエロ』(Consuelo, 1842-43) がアイルランド生まれの作家ジョージ・ムア (George Moore, 1852-1921) の小説『イーヴリン・イネス』(Evelyn Innes, 1898) に影響を与えた可能性を指摘し、両者に共通して見られる要素と相違点を比較分析した上で、女性オペラ歌手を主人公にすることによって小説にもたらされる特別な意味合いについて考察した。

『イーヴリン・イネス』の続篇である『シスター・テレザ』(Sister Teresa, 1901)がバルザックの『ランジェ公爵夫人』から受けた影響については既に指摘されているところだが¹、ムアが *Salve* (1912) の中で「19世紀の偉大なフランス文学者」の一人として George Sand を高く評価する内容の記述をしていることから、『コンシュエロ』が『イーヴリン・イネス』着想のきっかけのひとつになったということは十分に考えられよう。

I. プロット上の類似

『コンシュエロ』はコンシュエロという名の、『イーヴリン・イネス』はイーヴリンという名の女性がそれぞれ天才的な歌唱の才能を見出され、開花させ、複数の男性との関係について悩み、また芸術家としてのキャリアか、家庭か、という人生の選択を迫られるさまを、原則として3人称の視点から描き出した小説である。

コンシュエロ、イーヴリン両者ともに、母親もまた優れた歌手であったが、物語が始まる時点で既に死亡している。人生の早い時期に彼女らに大きな音楽的影響を及ぼすのは、父親的存在 (コンシュエロにおけるボルボラ) あるいは実の父親 (イーヴリンの父親イネス氏、パレストリーナの合唱曲の復興に関わっている) である。ヒロインたちは存分にその資質を発揮す

るためには彼らの保守的な音楽性の影響下からの脱却と自立を遂げる必要がある。まず、オーディションによって自己の才能を客観的に証明したのち、着実にオペラ歌手としての成功を収めていくことになる。

また、女性芸術家特有ともいえる問題、すなわち自分を必要としている男性との結婚と、プロの歌手としての活動が両立し得ないという問題が浮上する。そのジレンマの中でどのような生き方を選択すべきかヒロインが葛藤するさまの心理描写に、どちらの小説も後半部の多くのページをさいている。

II. 音楽のもたらす効果を描く語り/音楽のテーマが語りにもたらす効果

催眠術が一世を風靡した19世紀という時代、音楽が人間の深層心理におよぼす影響は多くの関心を集めていた。『コンシュエロ』にも『イーヴリン・イネス』にも、音楽が人間の心身に劇的な生理学的反応をもたらすさまが描かれる。『コンシュエロ』中でヨーゼフ・ハイドンは、芸術、そして音楽は人類を救うものであると同時に、「病氣、熱情、心に吹き荒れる嵐、他者に伝染する熱病」ともなりうるのだという。『イーヴリン・イネス』においても、イーヴリンの歌声を聴いた修道女たちは「調和の取れた深みのある歌声がまさに彼女らの血の中に」流れ込んできたとき「天使の顔の幻」を見るにいたるが、同時に「こんなに強烈に感じてしまうことは、正しくないのではないか」との畏れをもいだく。

オペラ歌手としてのコンシュエロ、イーヴリンは二人とも、あたかも憑依されたかのようにオペラの役柄と自分とを同一化し、役に感情移入しない限りは納得の行く演奏ができない。その結果、コンシュエロは演技中、「熱っぽい興奮の中で別次元の世界」に運び去られたようになり、「あたかも夢の中にいるかのように」演じる。一方のイーヴリンもまた、ワーグナーの『タンホイザー』のエルザ役を歌うとき、「夢の中にいるかのように」演じ、歌い、聴衆の存在によって催眠状態に陥り、高揚状態から夢遊状態、そして恍惚状態へといたる。

よく似通った興味深いエピソードがこれらの小説には描かれている。真摯な芸術家であるコンシュエロもイーヴリンも、真に心からの歌唱表現を可能にするためには、その役柄によって表された感情を自分のもの

として実感することが必要である。そのため、三角関係のただ中にある女性像（コンシュエロは『ゼノビア』のゼノビア役、イーヴリンは『トリスタンとイゾルデ』のイゾルデ役）を演じるとき、彼女たちはそれぞれ、自分と特に関わりの深い二人の男性との関係を必然的に想起することになるのである。

音楽のテーマが文体におよぼす影響も見逃せない。文壇デビュー当時は自然主義的な語り的手法を用いていたジョージ・ムアだが、『イーヴリン・イネス』を境に、外界から得た印象によって刻々と移り変わる人物の心理の内面の動きを自由に写し取る「メロディック・ライン」とよばれる文体を本格的に採用することになる。それには、雑誌 *La Revue Wagnerienne* の発行人であり熱心なワーグナー愛好者であったムアの友人、エドゥアール・デュジャルダンの直接的な影響があったことは言うまでもない。デュジャルダンはワーグナーの「ライトモチーフ」を散文で再現しようと「内的独白」の文体を実験的に創始した人物である。しかし、イーヴリンが歌うそれぞれのオペラの役柄が、現在の彼女の中にひそむ過去の彼女自身の心理の層をつぎつぎに呼びさましていくさまの描写には、『コンシュエロ』の「音楽の目的とは、感情を呼びさますることである」という思想のこだまをも見て取ることができないだろうか。音楽を媒介としてさまざまに反応していく人間の心理や思考の動きを、語りの流れを推進していく原動力の一つとして取り入れていくことは、『コンシュエロ』ですでにサンドが行っていたのである。

III. 相違点、そしてふたたび共通点へ

The Diva's Mouth (1996)のなかで Susan Leonardi と Rebecca Pope は、『イーヴリン・イネス』と続篇『シスター・テレザ』の中で最も徹底的に追求されているテーマは「歌姫と神性との関係、あるいはそういう関係が成立し得ないこと」だと記述し、さらに「これらの小説はすべて、歌姫であることとはすなわち、すでに墮落しているか墮落させられているということだと示している (p.60)」と結論する。たしかに、『イーヴリン・イネス』においては、『コンシュエロ』におけるような、芸術家の天才と絶対的な善性との間の無条件の相関関係は保証されていない。だからとい

って、*The Diva's Mouth*にいわれているように、「女性は・・・そのセクシュアリティによって、いかなる精神性を獲得することもできないように定められている」との立場を『イーヴリン・イネス』の語り手がとっているといえようか？そのように「精神性」と「肉体」とを切り離して考えるヴィクトリア朝的、カトリック的な二元論に対する批判的な態度を作中に読み込むことはできないだろうか？サンドの『コンシュエロ』においても「精神だけ」のアルベルトではなく、肉体と精神それぞれの感性をバランスよく備えたコンシュエロの人間性こそが、より完成したものとして描かれていたように。

ポーリーヌ・ヴィアルドーという有名な実在のモデルがあるとはいえ、『コンシュエロ』ではサンド自身を含む女性芸術家一般の生き方をめぐる問題が追求されているといえるであろう。それでは作品『イーヴリン・イネス』と作家ジョージ・ムアとの関係はどのようなものなのであろうか。ムアは女性歌手の問題を単に第三者としての視点から「共感をもって (Leonardi and Pope, p.57)」描いたにすぎないのか。私はやはり、主人公イーヴリンの中にムアの分身を見て取ることは可能なのではないかと考える。複数の男性の影響を受けることによって自分自身の音楽を形作っていくイーヴリンは、文学・芸術上のさまざまな「主義」をめまぐるしく取り入れながら作品世界を変容させていったムア自身の姿と重なる。演じる「役柄」によってイーヴリンの知られざる人格が表に引き出されてくるように、ムアの描いた登場人物たちは、それぞれ彼の人間性の一部が表出・表現される場であったのかもしれない。

注¹ C. S. Brown, "Balzac as a source of George Moore's Sister Teresa." *Comparative Literature*, Vol. xi, No. 2 (Spring 1959), pp. 124-30.

参考文献

- George Moore, *Evelyn Innes*. London: T. Fisher-Irwin. 1898.
- George Sand, *Consuelo*. 1842-3. Amsterdam: Fredonia Books, 2004.
- Susan J. Leonardi and Rebecca A. Pope, *The Diva's Mouth: body, voice, prima donna politics*. New Brunswick: Rutgers, 1996.

Wilhelm Heinrich Riehl の家庭音楽論

玉川 裕子 (たまがわ ゆうこ)

I. W. H. リールと音楽

『MGG 音楽事典』新版には「家庭音楽」という項目がある。そのなかで引用され、また参考文献として挙げられているもののひとつにヴィルヘルム・ハインリヒ・リール Wilhelm Heinrich Riehl (1823-97) の家庭音楽論がある。これはリールがドイツの詩人の詩にみずから作曲した歌を 50 曲集め、『家庭音楽』と名づけて 1855 年に出版した歌曲集の改訂第二版 (1860 年出版) に、作曲者自身が付した序論である (Des Tonsetzers Geleitsbrief. In: *Hausmusik. Fünfzig Lieder deutscher Dichter in Musik gesetzt von W. H. Riehl, zweite umgearbeitete Auflage, Stuttgart 1860*, Geleitsbrief は直訳すれば「通行許可書」の意、以下引用部分についてのみローマ数字で頁を記載する)。作曲者リールは、ジャーナリストとして活動したのち、バイエルンの王室から報道担当官として招聘され、以後同地でさまざまな官職および教育研究職に就いた。彼が関わった領域は政治、社会、経済から文化にいたるまで幅広いが、学問史的にはドイツ民族学の創始者と目されている。このように彼は音楽が本職ではない。にもかかわらず、家庭音楽およびサロン音楽について論じられるとき、しばしばリールの著作が引きあいにだされる。たとえば、『MGG 音楽事典』新版の「サロン音楽」の項目では、彼の名著『家族』から、「サロンというのは、その名がすでに示しているとおり、ドイツの家庭に接ぎ木された異国の植物である」(Sachteil 8, S. 866) という一節が引用されている。この引用が示唆している通り、リールの音楽論は、音楽について語りながら、同時に政治的立場の表明に他ならなかった。歌曲集『家庭音楽』序論は、彼の家庭音楽礼賛が、当時の社会文化状況全般に保守の立場からコミットしていたリールの政治的主張と不可分の関

係にあったことを、明確に示している。私たちにとってとりわけ興味深いのは、その音楽/政治論がナショナリズムのみならず、さらに性別特性の言説とも結びついていることである。以下にその部分を中心に、『家庭音楽』序論を紹介したい。

II. 『家庭音楽集』の出版意図

リールはこの『家庭音楽』という歌曲集の出版意図を、「簡素でまじめなドイツの家庭音楽」を供するためと説明する。そしてここに集められた歌が、外面的な効果をいささかなりとも考えていないので、サロンにおける演奏には適さないという。その代わりに、内面に影響を及ぼし、神聖な家庭の喜びのために歌われるのにふさわしく、いわば音楽による「家庭説教集」であると述べている (IX)。そのために彼は、作曲にあたってとりわけ次の 5 点に留意した。第 1 は詩人の精神を体現するよう努めたこと (自己表現ではなく)、第 2 は有節歌曲 (通作歌曲ではなく)、第 3 はピアノ伴奏付歌曲 (「歌曲伴奏付ピアノエチュード」ではなく、XI)、第 4 は長調 (短調ではなく)、第 5 はテンポや表現記号の過剰な書き込みの回避である。それぞれの項目ひとつひとつが、時代の潮流に物申すかたちで表明されている (括弧内がリールによって家庭音楽にはふさわしくないとみなされた時代の風潮)。彼はその克服のための手本を過去に求めた。時代風潮を憂い、その克服を「ドイツの過去」に探る——これは 19 世紀半ばのドイツ語圏で、ナショナル・アイデンティティ創出装置として結晶しつつあったドイツ学、およびその流れのなかで形成されていったドイツ中心の音楽史観の正確な反映ともいべきものであり、それ自体大変興味深い。私たちにとって、しかしとりわけ見逃すことができないのは、そうした音楽史観のなかにジェンダー表象が、両性非対称のかたちですべりこんでいることであろう。このことが端的にうかがえるのは上記 4) の調性を論じた部分である (XII-XIII 頁、以下当該部分については頁記載省略)。以下、この点についてもう少し詳しくみていきたい。

III. 調性とジェンダー

リールによると、現在短調の曲が流行しているが、ドイツ音楽は本来長調であるべきであるという。彼はその根拠をドイツ民謡に求めて、次のようにいう。

ドイツ民族の歌う真のドイツ民謡の多くは長調で、短調の曲はほんのわずかしかない。それはドイツ民謡の男らしく毅然とした根本的特質 *der männliche und mannhafte Grundzug seines Wesens* に合致している。それに対してスラブ音楽は短調が優勢である。

ここでは、「ドイツ民謡＝長調＝男性的」と等式化されている。それに対置されたのは「スラブ音楽＝短調」であり、それは以下にみるとおり、女性的であるとされる。もちろんドイツの作曲家も短調の作品を書いている。リールは、ヘンデル、グルック、ハイドン、モーツァルトは短調をあまり使わなかったが、バッハとベートーヴェンは短調を多く使ったことを認めている。だが彼に言わせると、この二人は天才で、その根源的で独創的な芸術的特質ゆえに短調を使う権利を持ち、彼らの短調は「女々しく軟弱なスラブ音楽のそれ *das weibliche und weibische der Slaven*」とは異なり、「男らしい理念を秘密のヴェールに覆い隠した短調であり、音楽作品を陰影に富んだ謎のなかに意図的に包みこむものである」という。それに対して、恩寵を与えられていないエピゴーネンたちによる短調は、「ロマン主義の病的な放心状態」に過ぎず、「無力さと精神の貧困を押し隠そう」とする以外のなにものでもなかったとされる。リールはさらに続けて次のようにいう。

こうして、秘密に満ち、深い精神性を持つベートーヴェンの短調の調べは、次第にサロン音楽家がパトロンのご機嫌うかがいのためにもっぱら愛用する調性になり下がってしまった。そして、その本質からして病的で、思い上がっていて、放埒で、女性的なものに染め抜かれている上流社会 *das überweibliche Wesen der feinen Welt* は、ふらふらとみさかひなく、やみくもに転調を繰り返す

返す短調の音楽に、その恐ろしい自己像を認めたのである。…… 家庭音楽は、健康な音楽でなければならない。しかし、今日、健康な音楽を作る以上の異端はない。フランス人とイタリア人の影響のせいで、ほんの五十年前にはまだきわめて健康ではつつととしていたドイツの音楽は、めそめそ泣き続けるようなものになってしまった(後略)。

ここでは、長調短調という音楽的要素が、音楽ジャンル(家庭音楽とサロン音楽)のみならず、階級(市民と貴族)、ジェンダー(男性と女性)およびナショナリティもしくはエスニシティ(ドイツ民族とスラブ・ラテン民族)の対比と、直接重ねあわされている。リールはみずから作曲した詩および詩人についてコメントしている部分で、17世紀の詩人の詩に触れて、「誠実かつ飾り気がなく、市民的で尊敬に値するものを持ち」(X)、教会音楽の要素と「ドイツ民謡の力強い響き」が混じりあい、「健康な思想」や「生まれつきの簡潔な機知」(XI)をもっていると述べている。これはリールが「ドイツの家庭音楽」の理想とするものを端的に語っているが、上記引用部ではまさにこの理想像を反転させたものが、非難すべきものとして提示されている。本来それ自体は中立のはずのスラブ・ラテン音楽や短調、そして女性という表象が、二項対立の一方の極に置かれ、他方を称揚するために貶められ、ネガティブに意味付けされてしまっているのである。

以上みてきたとおり、「家庭音楽」を礼賛するリールの言説は音楽について語りながら、一方でドイツ・ナショナリズムの機運に掉さし、他方で女性嫌悪を醸成するものとなっている。市民社会興隆期において、家庭および家庭の音楽実践は、たしかに女性がそこに囲い込まれた領域ではあったが、それなりにポジティブに意味付けられていた。19世紀中葉、ドイツ・ナショナリズムの言説が、女性嫌悪を伴いながら言揚げされ始めたとき、「女性の領域」とされていた家庭からさえ——少なくとも言説のレベルにおいて——女性が疎外され、女性の音楽実践そのものを貶める言説がつむがれていく事態が出来た。リールの「家庭音楽礼賛」は、こういうことを示しているのではないだろうか。

2007年度第7回例会(2008.2.17) 発表要旨

“Think globally, Act locally/
地球規模で考え、地域単位で動く”

～柳兼子(1892-1984)の発言から見る

「日本・女性・音楽」～

小林 緑(こばやし みどり)

本稿は2008年3月を以って33年間に及んだ国立音楽大学[以後国音]教員を定年退職(65歳)するに当たり、2007年12月に行なった最終講義に拠る発表の要約である。最終講義では参考資料として「女性作曲家音楽祭2007」の『ガイドブック』、「日本・女性・音楽—パリでのコンサートに想うこと」(『春秋』2003/11)、「満足八割・失望二割—女性作曲家音楽祭2007を終えて」(『婦人通信』2007/11)を配布。レジュメには近代日本の女性と音楽[伝統音楽は除く]関連文献を載せ、また女性作曲家を中心に知られざる音楽史・音楽実践と柳兼子を繋げるべく選んだ音源から8曲を試聴した。

↓

I. 「最終講義」は「自分史」を語る場ともされるから、この際、ごく雑駁に私の音楽的教育基盤と現在の活動にかかわる「個人情報」を開示してしまおう(以下敬称略)。

まずは幼時より芸大修了まで、西洋クラシック音楽一本槍で洗脳されてきたことの不運。ついでフランス留学時代(1971-72)から現在に至るまで、同期留学性の韓国人アーティスト金順基との交流がもたらした衝撃・影響の大きさ。1993年に「女性と音楽研究フォーラム」を立ち上げ、今に至ること。その余録として、美術史研究グループ「イメージ&ジェンダー研究会」を知り、若桑みどり、千野香織、池田忍、金恵信など、美術史におけるジェンダー・女性アーティスト研究の隆盛と深化に感嘆! 地元とのつながりを重視して、現都議福士敬子始め杉並区在住の女性活動家たちの地域活動にささやかながら協力。1999年国音派遣在外研究を機にFMF(スイス)、AFM(仏)、CID(リュクセンブルク)などヨーロッパの「女性と音楽」組織との接点を獲得。その国音が唯一の大学として立地する、立川市の男女

共生推進会議への参画が、同市女性センター”アイム “でのコンサートに発展、非常勤で教える。和洋女子大学での講義とミニ・コンサート同様、現在も継続中。前後して自身の目指すものとの乖離に耐え切れず日本音楽学会から退会。2001年から二期6年間、NHK 経営委員を経験、巨大メディアの最高意思決定機関における女性の存在理由を自問しつつあくまで一視聴者の立場から精一杯の発言。公私にわたる25年来のパートナー谷戸基岩との多岐にわたる議論と意見交換…

授業や活動に、上記各方面から得た「もう一つの視点」を可能な限り反映させてきたつもりだが、最終的に私の志向するところは次の3点に集約される:

1. 「女性」に代表される無視・忘却・差別の構造/諸相を知りたい(知って欲しい)
2. 女性演奏家/作曲家の実像を出来るだけ可視化したい(可視化してほしい)
3. ”芸術”、”クラシック”の呪縛から自由になりたい(自由になって欲しい)

II. 柳兼子(1892-1984)の活動(とその隠蔽)

柳兼子はドイツを中心にフランス、イタリア、日本語の歌で90歳まで現役を通したアルト歌手。ベルリン(1928)、ボストン(1929)、パリ(1976)でも歌い、日本芸術院会員(1972)にも選出された例外的女性である。私生活では柳宗悦(1899-1961)の妻(1914~)として民芸運動をともに支え、朝鮮美術保存(1921~)、日本民藝館開設(1936~)、沖縄民芸研究(1939~)などに尽くしたのみならず、息子三人の育児と家事全般、民芸館を訪れる多数の来客の接待なども一手に引き受けた。こうした兼子の目覚ましい働きと演奏収益なしには宗悦の業績は実現しえなかったにもかかわらず、百科事典宗悦項目、宗悦全集、民藝館展示・売店、柳家住居では不在同然の扱いを受けている。

国立音楽大学教授(1954-72)として先輩にも当たるこの女性に強烈な関心をそそられた私は、最終講義の論題に迷うことなく彼女を取り上げた。以下、兼子の発言(門弟松橋桂子による『柳兼子伝』[水曜社、1999]から引用)に私見を絡め、「地球規模で考え、地域単位で行動する」という発表テーマをカヴ

アールするものとしたい（当日は、併せて『ドキュメンタリー 兼子』（兼子製作委員会 2004）からの若干の映像も紹介した）。

- 1.帯はお相撲さんの締め込みと同じで、発声の腹式呼吸を整えるのにとてもよい
→相撲愛好と、幼少期の長唄稽古が音楽修行の原点であったことを重ね合わせて
- 2.ああいうものを理解して歌ふことの出来る唄ひ手がございましょうか？メロディそのもの、ハーモニイそのものが…しみ、マア、しみでございますね →1912年、シェーンベルク『心に芽生えたもの Herzgewächse』（1911）を歌えと勧めてきた宗悦に答えて
- 3.どうぞ、女中さんのヤブ入りみたいに、半年ばかり私におひまを下さい
→1928年、兼子のドイツ行きを強硬に反対する宗悦に懇願して
- 4.音楽会のお金は第一銀行の特別口座へ振り込んでもらふことになって居ます…お役に立ててくださいまし→1928年渡欧の途次、釜山での演奏会を終え宗悦に宛てて
- 5.『第九』のアルト・パートは歌っていてもちっとも面白くないから…→1937年？指揮者ローゼンストックからの出演依頼を断った理由を評論家山根銀二に尋ねられて
- 6.あんな歌、チョロイわよ…山田耕筰の歌はみんな女学生唱歌よ→1944年、戦時下の慰問で歌った山田の『兵士の妻の祈り』について、当時山田が妻永井郁子（兼子の音楽学校同級生にして翻訳歌唱の提唱者でもあった）に暴力を揮っていた事を難じつつ
- 7.黒人の声で歌われた黒人霊歌の素晴らしさに比べると『魔王』などの演奏は多少の破綻がある。けれども多少音が下がろうと、その奥に、それを補って余りあるものを聴く力を持たなければ…声だけ張り上げて歌うトラウベルのような人と、アンダスの音楽性がいかに違うかを→1953年に来日したマリアン・アンダスとの対談を門弟と回顧して

III. 結びに変えて

日本の伝統芸への愛着とリサイタル等での和服姿—83歳時の“ハバネラ”仏語歌唱の映像はまさに衝撃的だった！シェーンベルクやベートーヴェンや山田耕筰など、権威筋に対する容赦なき批判。白人有名歌手を難じ黒人歌唱への深い共感を吐露…有名・メジャー志向に真っ向から齒向かうようなIIに見る兼子の物言いは、ガヤトリ・スピヴァクの以下の発言にもびたりと重なる。「父はあらゆる権威に対して疑問を抱くことを、母は他者への関心を、教えてくれましたが、何より大きいのは反カースト主義を実践し、高等な理論より世俗のことに興味を抱くよう育ててくれたことでした」（『週間金曜日』2007/11/26号でのインタビュー記事より）。現コロンビア大学特別教授ながら故国の貧困地域で識字教育を推進するこのインド人フェミニストこそは、まさに「地球規模で考え、地域単位で動く」を体現している女性。恐れ多くも私と同年生まれとのこと…だが私を何より強く撃ったのは、念願のドイツ留学をめぐる兼子の宗悦に対する態度である。滞欧の必要資金全額を自ら賄い、留守中の生活費も調達した挙句、出立後の演奏会出演料まで夫に差し出しているのだから…私が敬愛する日本の女性問題研究者の一人、大越愛子はその著『近代日本のジェンダー』（三一書房、1997）のなかで、「実家と完全に離れて婚家に入った女性の生きる場はもはや婚家しかない…家の存続を第一義的に考える体制を内面化し家霊として生きることによって女性にも実質的権力を手に入れる可能性が開かれた…だがそのためには女は男以上に男性中心の家制度と一体化しなければならない。自らを否定する制度に一体化することでしか突破口を見出せないところに、女を何重にも縛り付ける近代的ジェンダー・イデオロギーの陥穽があった」（p.60）と喝破した。音楽は視座に無かったかも知れぬ大越のこの一節が、実は近代日本における「女性と音楽」の問題をも照射していると私が受け止めたとして、決して的外れではあるまい。

以上

金井喜久子の音楽活動

～作曲に対する意識の変化を追う～

花岡 美智 (はなおか みち)

本発表は、筆者が2008年3月に提出した卒業論文「金井喜久子の活動とその背景」の紹介である。

I. 本論文の目的

金井喜久子は沖縄に生まれ、第二次世界大戦中から東京を拠点に活動した作曲家である。交響曲、室内楽曲、声楽曲など多ジャンルにわたる作品の多くにおいて、「沖縄音楽を世界に伝えたい」という信念のもと、沖縄民謡が素材となっている。

音楽は、人や文化の交流の中である部分では互いに影響を受けて変化し、またある部分では、多くの出会いを経ても「〇〇音楽」としてのアイデンティティを保っている、という事に興味を持つ筆者にとって、「沖縄音楽を世界に伝えたい」という信念を持って行われた金井の活動は興味深いものである。作曲家自身も人や文化の出会いの中で活動している為、その交流に影響を受けるのではない。そう考えた時、日本の一部とされながらも、文化の違いに葛藤していた沖縄に生まれ育った金井が、東京を拠点に活動を行ったことに関心を持った。特にその活動の時期は、「本土」の作曲界でも、西洋芸術音楽の手法に倣いつつも日本人作曲家としての独自性を求める動きがあった時期であり、そうした議論に加わったことによる金井の活動への影響は大きかっただろう。

そこで、本論文は金井の、自身の活動に対する意識の変化を捉えることを目的とした。

II. 概要

第1章では金井が作曲家を志すに至った背景に触れた後に、年表及び作品表の作成を通して金井の活動を整理した。演奏会のタイトルには沖縄音楽を取り入れた作品による演奏会であることを前面に出したものが多く、「沖縄芸術学院設立基金募集」「沖縄こどもの国設立のために」などと、故郷である沖縄に貢献する活動が目立った。「沖縄ペルリ百年記念」(1953年)や「沖縄県発足祝賀演奏会」(1972年)、「沖縄海洋博覧会」(1976年)といった沖縄にとって重要な行事で作品を発表している事から、金井が沖縄でも作曲家として認められていた事が分かる。また、沖縄民謡について歴史的、理論的解説を行い、民謡の採譜をした『琉球の民謡』(1954年)など、作曲以外の方法での沖縄民謡の伝播も行っている。

一方で、作曲家グループ「白濤会」で他の作曲家と意見交換をしたり、「国際民族音楽会議」(ブラジル)や「ウメンスカウンスル」(イギリス)に参加したりと、日本以外の「世界」との交流も明らかになった。

作品名からもまた、沖縄音楽を積極的に取り入れている傾向が窺えるが、『12音階による小品』といった前衛音楽の影響が想像される作品や、尺八や箏、十七絃、エレクトーンといった楽器による作品が含まれることから、当時の日本の作曲界からの影響もうかがえる。また、管弦楽曲が多いことも特徴であり、1950年頃からは舞台作品へのこだわりも見られる。

第2章では、東京を拠点に活動した事による、金井の活動への影響を考察した。金井は作曲家仲間との意見交換の中で、西洋の作曲手法を取り入れながらも日本人作曲家としてのオリジナリティを求めることのバランスや、新しい作曲技法への挑戦と聴衆に受け入れられる曲を書くことのバランスの取り方といった問題に直面する。この課題に対して、「日本の」作曲家であると同時に「沖縄の」作曲家である金井だからこそ出来ることを見出していく事になる。また、「日本の」作曲家として世界を意識したことにより、沖縄民謡の「普遍性」に加えて民謡全般の「普遍性」について意識する発言が増えていく。

第3章では、上京後の金井の沖縄との接点を取り上げて考察し、「沖縄音楽のすばらしさを伝えたい」という希望が、ある部分で使命感に変わったことを明らかにした。

また作品においては、金井が、歌・踊り・管弦楽が一体となった舞台作品が「沖縄音楽」の「普遍化」に、より適していると考えに至った経緯を声楽曲、器楽曲の特徴と自叙伝より明らかにした。金井は声楽曲を、「本土」の人に親しんでもらい易い形だと重要視しているが、それ故に「声楽曲に取り入れるには適さない」リズムを表現できるという点では、器楽曲の作曲に興味があった。また、重厚な響きへの志向により、特に管弦楽曲の作曲を好んだ。その後、「本場」のミュージカルを意識した金井は、日本には歌舞伎や能といった日本の誇るべき「ミュージカル」が存在することに気づく。「伝統のなかに生きつづけている生命を育て、発展させ、実用に供すること」の必要性に気づいた金井はその視点から沖縄歌劇を見直し、その雰囲気「あまりにもミュージカル的」であることを発見する。

終章では、「沖縄の音楽を世界に広めたい」という情熱をもって行われた金井の活動が沖縄音楽に与えた影響を、沖縄の音楽文化の「近代化」という面から考察した。第3章までに明らかにした、金井の活動とその活動に対

する意識の変化は、金井が沖縄の音楽文化の「近代化」に必要な要素に気づき、個人レベルでできることから模索していったプロセスと捉えることができる。金井が「沖縄音楽のすばらしさ」を伝えようとした対象は「日本」や「世界」であると同時に沖縄の人々であった。

ここで重要となるのが、金井の「日本」の作曲家としての活動が「沖縄」の作曲家としての意識に影響を与えたということ。そしてその影響が、「沖縄の」作曲家として沖縄の音楽文化の「近代化」に貢献する活動を支えたということである。

「沖縄の」作曲家として、「日本の」作曲家として、何度もグローバルなものに触れてはローカルなものへ帰帰するということを繰り返し、その均衡を保とうとした点で、金井は日本の戦後の作曲家の中でもユニークな存在であるといえるだろう。

また、金井の活動は、まずアイデンティティを確認する対象として「日本」があり、その先に「世界」があるという戦後沖縄の文化状況のモデルとして見るができるという点において、沖縄の文化研究においても重要な位置付けができるのではないかと考えられる。

Ⅲ. 当フォーラムでの発表を終えて～女性作曲家としての金井～

本論文を執筆した時点では「女性作曲家としての金井」という視点からの考察は行わなかった。自らの信念を貫き、精力的に活動する金井の自叙伝や雑誌記事等からは、金井が女性であることを意識させる記述が目につくことがなかったからだ。そこで、当フォーラムでの発表の機会に、女性作曲家としての金井を考察した。

金井の活動を支えた人物として、夫の儼四郎氏の大存在は大きい。金井を女性作曲家だという視点から見た時に注目すべき点は、声学や器楽作品に留まらず、管弦楽曲や舞台作品を手掛けている点である。また、作品発表会も多く行っているが、これらは夫の経済的な支えによるといえるだろう。『日本戦後音楽史』によると、本論文で金井の活動に大きく影響したと考察した作曲家グループ「白濁会」に関しても、経済的な柱は金井であったという。

この恵まれた環境を基盤に金井は、「金井喜久子後援会」が結成されるなど、自身の努力と行動力で人々を惹きつけ、活動の幅を広げていく。晩年の金井は「ひめゆり平和祈念資料館」建設に尽力するが、女学校の後輩たちへの想いを同じくする女性のリーダーとしての役割を果たしたといえる。

また、作品の面では、金井が女性だったからこそ、これほどまでに民謡を大切にしたとも考えられる。金井は自叙伝『ニライの歌』の中で民謡の重要性について、「大

人になってからも、母の懷で聴いた子守歌には愛着を感じる」からこそ、「世界中でそれぞれの歌が歌い継がれている」と述べている。これは女性ならではの、母親ならではのものであるとも考えられる。

よって、女性として男性主流であった作曲界で活動したこともまた、金井自身の活動に重要な影響を与えると同時に、その活動自体も作曲界や社会での女性の地位に影響したと考えられ、今後の課題の一つとしたい。

■参考文献

<文献資料>

石田一志『モダニズム変奏曲—東アジアの近現代音楽史』 東京：朔北社、2005年。

太田好信『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか』 京都：人文書院、2001年。

小熊英二『<日本人>の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』 東京：新曜社、1998年。

金井喜久子『琉球の民謡』 東京：音楽之友社、1954年。

金井喜久子『ミュージカル世界の旅』 東京：音楽之友社、1964年。

金井喜久子『愛のトゥバルマー—ある歌姫の物語』 沖縄：私家本、1984年。

金井喜久子『ニライの歌』 沖縄：琉球新報社、2006年。

小山清茂『田螺のうたが聞こえる』 東京：音楽之友社、1984年、148～149頁。

辻浩美「日本の女性作曲家（明治期から昭和初期まで）—幸田延・松島彝・金井喜久子・吉田隆子・外山道子・渡鏡子」、小林緑編『女性作曲家列伝』 東京：平凡社、1999年、291-295頁。

富樫康『日本の作曲家』 東京：音楽之友社、1956年。

日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史 上・下』 東京：平凡社、2007年。

法田典子『金井喜久子による沖縄音楽の展開—沖縄民謡を素材とした歌曲創作の試み』 修士論文、神戸大学、2002年。

宮城鷹夫『沖縄・わが心のうた声—宮良長包の世界とその背景』 東京：プロジェクト・オーガン出版局、1980年。

<雑誌記事>

清瀬保二・平尾貴四男・柴田南雄・金井喜久子「現代日本の作曲界は如何にあるべきか」、『音楽芸術』 1952年3月、26～38頁。

金井喜久子「琉球秘話」、『音楽芸術』 1952年4月、53～54頁。

山本直忠：音楽芸術 1952.8 口絵

金井喜久子「沖縄を訪れて」、『音楽芸術』 1953年10月、210～212頁。

<その他>

金井弘志氏所蔵プログラム資料（別紙）

ニュース etc.

■Donne in Musica より書籍寄贈

今年1月末、イタリアの女性と音楽団体「アドキンス・チッティ財団・音楽における女性 Fondazione Adkins Chiti: Donne in Musica」の事務局よりフォーラム代表の玉川にメールがありました。同財団発行の書籍の中から希望の数冊をフォーラムに寄贈したいとのことで、出版目録も添付ファイルで送られてきました。ありがたい申し出ではあるのですが、言語（イタリア語/英語）、および保管場所の問題もあり、3月のフォーラム例会のうちに、寄贈を受けるかどうか、受けるとしたらどのような形が良いかについて話し合いました。結果は以下のとおりです。

- ・イタリアとの関係が深い櫻田智子さんが所有を希望すれば、寄贈を受ける。
 - ・書籍の選定は櫻田さんにお任せする
 - ・先方には、当フォーラムの形態上、寄贈図書を共有財産とすることが困難なので、フォーラム会員の一個人が所有することになる旨を説明したうえで、希望書籍を伝える。
- 櫻田さんが何冊かの書籍を希望されたので、現在、Donne in Musica の数冊の本が日本に向かって航海中です。ほとんどがイタリア語ですが、興味をお持ちの方は玉川までお尋ねください。

■新刊書案内

『ドイツ近現代ジェンダー史入門』(姫岡とし子/川越修編、青木書店、2009年)

上記書籍が2月に出版されました。ドイツの政治・経済・歴史・文化等の研究に携わっている研究者が総勢20名、ジェンダーの視点からそれぞれの分野に関わるテーマについて執筆しています。本書の課題は、「時代変化とジェンダーとの相互関係を明らかにし、(中略)いかに歴史がジェンダーに依拠して形成されているのかを示」(p. iv) すという、「はじめに」に記された言葉に要約されます。フォー

ラムからは玉川が、「女性の音楽実践とジェンダー」というテーマで一文を寄せています。

■フェミニスト理論と音楽 第10回

1991年から隔年で開催されている国際会議「フェミニスト理論と音楽」Feminist Theory and Music 第10回が5月27日から31日まで5日間に渡り、アメリカのノースカロライナ大学で開かれました。今回のテーマは「Improvising and Galvanizing」今年4月5日に亡くなったフェミニスト音楽学者エイドリエンヌ・F・ブロックを記念するセッションを含め、多数の個人発表のほか、チャーサーの「トロイロスとクリセイダ」をフェミニスト的に読み直したオペラ「クリセイダ」(アリス・シールド作曲)の上演、ワークショップ「フェミニスト・エスノグラフィと口承」等々、多岐にわたるプログラムが実施されました。詳しくはこちらをご覧ください。

<http://www.uncg.edu/mus/FTM10>

■フォーラムの書籍

当フォーラムの所有物として、次の2冊の本を事務局でお預かりしています。貸出ご希望の方は、市川までお申し出ください。

『転換期の音楽 新世紀の音楽学フォーラム』「転換期の音楽」編集委員会編(音楽之友社 2002年)

*角倉一朗先生古希記念論文集で、第1部の頭に小林緑著「声と無名性」掲載。

『Komponistinnen vom Mittelalter bis zur Gegenwart』Eva Weissweiler 著(Deutscher Taschenbuch Verlag, 1999)

*ギリシャのサッフォーから現代に至る主な女性作曲家について概説。独語

<編集後記>

たいへん遅れての発行になりましたことをお詫びいたします(すべて編集担当の責任です)。市川啓子さんに何から何まで教えていただきながらの作業でした。次号もがんばります。

(吉田朱美記)

女性と音楽研究フォーラム会報 第9号

Bulletin of Women and Music Study Forum Vol.9

編集・発行 女性と音楽研究フォーラム会報担当(吉田朱美)

発行日 2009年 7月 11日(土)

